黒人（くろひと）は高崎山を越えたか

佐藤末喜

はじめに

高市連黒人の名歌

四極山うち越え見れば笠縫の
島こぎかくる　棚無し小舟　（万葉集巻三）

は、高崎山を詠んだ歌であるとして、大分市や観光協会は観光名所に登録し、ビデオなどで宣伝している。かつて大分市教育委員会は「大分市文化財だより」[①]でこのことを大きく取上げている。生石港町に大分市が作った、万葉歌碑公園の銘文にも大書してあるが、地元大分ではどうやらこのことが定説視されている風に思われる。四極山の所在については古来、摂津・三河・近江・駿河・豊前・豊後等の諸説があり、現在も未詳である。三河説は江戸時代の大学者・契沖が提唱して有名になったが、現在では大勢として摂津説が有力であり、豊後・高崎山説は極く少数説である。万葉集巻三のこの名歌は、本当に高崎山を詠んだ歌なのであろうか。本稿は筆者の年来の素朴な疑問をまとめたものである。

一　豊後説の根拠

まず豊後説について概観してみよう。豊後説は高崎山が別名・四極山と呼ばれたことを根拠としている。

（一）豊後国志、高崎山の項に

「賀来郷高崎村に在り、又四極山と名づく、或は柴津に作る。和歌詠ずる所。和歌者流域は曰く、四極山は摂津国に在り、或は曰く豊前国併笠結島、其説紛々、未だ孰是なるを知らず。」

（二）角川日本地名大辞典・四十四、大分県のP484、高崎山の項に

「（前略）また高崎山を詠んだ歌も多く、「万葉集」の高市連黒人、「続後撰集」の藤原俊成、「新続古今集」の三品親王、「夫木抄」の顕昭・俊成、「続古今集」の藤原俊頼が有名。、、（後略）」

（三）日本歴史地名大系第四十五巻・大分県の地名（平凡社）のP606、高崎山の項に

「（前略）四極山は「万葉集」巻三に収める「四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎかくる棚無し小舟」（高市黒人）をはじめとして、多くの歌に詠まれた。歌枕として知られ、「八雲御抄」は豊前とする。「続後撰和歌集」に藤原俊成の「しはつ山ならのした葉ををりしきてこよひはさねんみやここひしみ」が載る。、、（後略）」

（四）高市連黒人の羇旅歌碑

昭和六十年五月、大分市と大分市観光協会は生石港町に万葉歌碑公園を作り、市長佐藤益美氏揮毫の歌碑を建てた。その銘文は以下の通り。

「四極山うち越え見れば笠縫の

島こぎかくる棚無し小舟」

この歌は万葉集巻三に収められている歌です。作者の高市連黒人についてはよく知られてはいませんが、文武天皇のころ（西暦七〇〇年前後）宮廷歌人として活躍、天皇の外出のお供などの他、日本各地を旅行して、旅の歌をたくさん作りました。残っている歌は十八首、短歌ばかりですが、自然を冷静な心で見つめ、印象的で、鮮明で、格調の高い作風は万葉集の中でも特に個性的です。四極山・笠縫島の所在については我国で最も古い歌論書「八雲御抄」（鎌倉初期）に豊後説があげられ、四極山は今の高崎山、笠縫島は大分市生石港町のこの島であると古来から伝えられてきました。江戸時代国学者の契沖は愛知の三河説を、賀茂真渕は大阪の摂津説を唱えていますが、どちらも根拠が薄弱なため決め手となっていません。むしろそれ以前から伝えられてきた豊後説を考証する古い地図や古い記録がたくさんあります。そこで豊後の四極山・笠縫島が和歌の名所として永く後世に伝えられるようここに歌碑を建てます。」

（五）大分市史

大分市史（中）第三章、北朝軍の拠点高崎山城の項に

「以下八[3]首は、四極山と眼下の笠結島を詠んだものであるが、四極山は摂津国（大阪府・兵庫県）の山とも、また豊前国の山ともいわれ、高崎山の古称とは確定していない。しかし、当時国司が赴任あるいは帰京の際、海路浜脇に上陸し、山越えで豊後国衙に入ったり、逆のコースを取って帰京する場合の情景を耳にした公家が遠く高崎山に思いをはせて詠んだとすれば、高崎山でないと否定するわけにはいかない。ともあれ、大分の高崎山をめぐる古代のロマンとして受けとめておいてもよいのではなかろうか。」

豊後国志の編者・唐橋世済（君山）は、さすがに摂津説や豊前説を挙げて断定を避けて慎重な記述をしているが、（二）の執筆者は他の三首も高崎山の歌として断定している。（三）の執筆者は豊前説を紹介しつつも、俊成の歌とともども高崎山の歌としている。（四）の歌碑は古来からの伝承をもとに断定している上、「八雲御抄」を根拠としているが、同書の五巻、名所部・嶋の項には、「かさゆひ（豊前）」・「かさぬひ（豊後）」とあり、これが豊前説・豊後説の根源をなすと思われる。同書・山の項には「かがみ（豊前、鏡）」「ゆふ（同木綿）」「くたみ（同朽網）」「あら（同荒）」「しはつ（同四極）」とあり、「ゆふ」以下は明らかに豊後所在にもかかわらず、「同」として豊前としているなど誤謬も多いのである。「八雲御抄」を金科玉条のごとく扱うのは如何かと思われる。

（五）の大分市史の説が前説（二）～（四）と違うのは、作者が実際に現場に足を運んで詠ったのではなく伝聞歌であるとしている点である。黒人のこの歌は、山の頂から眺めた一瞬の光景を捉えたもので臨場しなければ詠えない高度の叙景歌である。都の公達が耳

にした情景をもとに空想して詠んだなどといえるものではないと筆者は思う。「国司等が赴任の往復で眺めた情景」といわれるが、後述するように当時も今も官道上から笠結島を見通し得るポイントはないのである。七首の中には黒人の本歌をもとにした所謂本歌取りもあり、成立年代もまちまちであるから伝聞で詠んだらしい歌も入っているが、本歌である黒人の歌はこれらとは区別して鑑賞しなければならない。それにしても、大宝年間の当時僻陬の豊後にある高崎山・四極山が歌枕として都びとの人口に膾炙されていた形跡はないのである。筆者はこの説には到底承服できないが、異説としてあえて紹介しておく。このほかに、佐々木均太郎氏や滝口弘氏も強力な豊後説論者であるが両氏の説については後段で解説しよう。

豊後説論者が圧倒的に多い中で異彩を放つのは佐藤蔵太郎（鶴谷）である。その著「豊後史蹟考」（明治三十八年発行）で彼は

「鶴谷云、按ずるに笠結島の称は、高崎山の一名を四極山というより好事家の名けたるにはあらざるか。四極山打越見者笠縫之島漕隠棚無小船　と詠したる歌あり。されどこは摂津の磯歯津山を詠たるにて、我が豊後の高崎、即ち四極山を詠しにはあらず。歌枕秋の寝覚にも、此島を豊後としたるが、後正誤して摂津と改めたり、又前に掲たる四極山の歌、及び左に掲るものも我が豊のにはあらざるべけれれど、参考の為めとしも思ひつる。」と明確に豊後説を否定している。

二　地名学からの考証

次に地名学上の見解をみてみよう。まず地名学の泰斗、吉田東伍は名著「大日本地名辞書」の摂津国の項（Ｐ５１１）で、

（一）磯歯津、シハツ（四八津）

日本書紀、雄略巻云、身狭村主青等、共呉国使、将才伎、泊於住吉津、是月為呉客、通磯歯津路、名呉坂。

四極山うち越見れば笠縫の島
こぎかくるたななし小舟　〔万葉集〕

千沼回より雨ぞふりくる四八津の
あま網手網ほせりぬればたへんかも
〔同上遊覧住吉浜、還宮之時、応詔作歌〕

古事記伝云、磯歯津は万葉集に四八津の白水郎を和泉千沼海と読合せたり、住吉津と相近し、住吉の東なる喜連村は呉を訛りたる者と云ふ、住吉より喜連へ行く間にひくき岡山の横たはりてあるぞ四極山にて、呉坂は此なるべし。

○按ふに磯歯津詳ならず、古事記伝に住吉喜連の間に坂ありと云ふも、住吉の東八町許に地勢梢高まれど坂と云ふべき者なし。書紀通証云、住吉一名磯歯津。

（二）日本文学地名辞典（Ｐ３７２～３７３）では

しはつ（四極）

未詳。大阪府（山城国）大阪市住吉区から東住吉区の東南部にかけての地か。「雄略記」に「為呉客道、通磯歯津路名呉坂」とある。

血沼廻より雨そ降り来る四極の
白水郎網手網乾せり濡れあへむかも
守部王・万葉集六（999）

しはつやま（四極山）

未詳。（Ⅰ）大阪府（山城国）大阪市住吉区から東住吉区の東南部にかけての丘陵。（Ⅱ）愛知県（三河国）幡豆郡幡豆町・吉良町周辺の山。（Ⅲ）滋賀県（近江国）の山などの説がある。

四極山うち越え見れば笠縫の
島漕ぎかくる棚無し小舟
高市黒人・万葉集三（272）

しはつ山うちいでて見ればかさゆひの
島漕ぎかくる棚なし小舟
よみ人しらず・古今和歌集二〇（大歌所御歌）

笠縫の島

未詳。（Ⅰ）大阪市東成区深江。摂津笠縫邑跡のある深江神社（笠縫神社）（Ⅱ）愛知県渥美湾内の前島　などの説がある。

（三）**歌ことば歌枕大辞典**（久保田淳、馬場あきこ編、P418・角川）によれば

四極山（しはつやま）

現在地未詳。初例の「万葉集」の「四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎ隠る棚なし小舟」（巻三・272・274・黒人）が「古今集」（1073）にも入集しており、歌枕関連書をはじめ「万葉集」「古今集」の諸注釈書では、駿河、三河、摂津、近江、豊前、豊後などの諸説が乱立しているが、現在では摂津、三河の両説が有力とされている。（後略）

（四）**万葉集事典**（佐佐木信綱著・平凡社、P523）では

しはつ　四極、四八津

大阪府住吉区住吉の南より中河内郡に通ずる依羅池北岸をいうか。今の安部野附近の丘陵を四極山とし、その南が磯歯津であったと見るべきであろう。なお近江、豊前、三河等の諸説あり、三河説は一概に捨つべきでないが、雄略記に呉客の為に作った磯歯津路があるので摂津説をとる。

〈例〉

四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎ隠る棚無し小舟
（3の272）

血沼廻より雨そ降り来る四極の
白水郎網手網乾せり濡れあへむかも
（6の999）

かさぬひのしま　笠縫之島

沖の大阪市城東区深江附近にあった島。古昔は入江の湖沼地帯でその中にあった島。三河説では愛知県幡豆郡の吉田村、宮崎村附近の島といふ。

（五）**萬葉集地名歌総覧**（樋口和也著・近代文芸社）では

四極山は攝津説、三河説があるが、〔四八津→999〕や雄

略紀（十四年正月条）の磯歯津路の例から、大阪市住吉区から東住吉区の東南部へかけての丘陵と思われる。笠縫之嶋は大阪市東成区深江に笠縫神社がありその一帯が往古の島で菅を産し、里人は笠を作った。（中略）四極山から笠縫嶋がよく眺められたのであろう。（P105）

千沼廻は千沼のあたり。チヌは和泉国の古名で、崇神紀（七年八月条）には茅渟縣とある。四八津之白水郎のシハツは四極山（272）の西方の地を云い、その海浜が住吉乃津（4245）の一画を占めていたのであろう。（P227）

以上みてきたように、地名学上からは摂津説が断然多く、三河説がこれに続き、残念ながら豊後説は極めて少数説である。ここで参考に摂津説・三河説の地元ではどのように認識されているのかを、角川・日本地名大辞典で見てみよう。まず摂津説を同辞典・大阪府の項（p583）から、

（六）**しはつ　磯歯津**

〈古代〉奈良朝から見える地名。摂津国住吉郡のうち。四極とも書く。「日本書紀」雄略天皇十四条によれば、身狭村主青らが、呉国の使とともに住吉津に泊まったが、その正月に「呉の客の道を為りて、磯歯津に通す。呉坂と名く」という。また「万葉集」巻三に「四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎかくる棚無し小舟」と見え、住吉より喜連に行く間にある低い丘が四極山という（地名辞書）「万葉集」巻六に、天平六年難波行幸の時の歌として「千沼廻より雨そ降り来る四極の海人網手綱干せり濡れあへむかも」が見え、左注に「右の一首住吉の浜に遊覧し、宮に還る時に、道の上にして守部王詔に応じて作る歌」とあることから、当地は住吉と難波宮との間に所在したことがわかる。なお住吉の一名が磯歯津とする説もあるが（日本書紀通証）、詳細は不明。現在の大阪市の住吉区から東住吉区東南部にかけての一帯と推定されるが、詳細は不明。

次に三河説の本場を同辞典・愛知県の項（p646）から

（七）**しはとのごう　磯伯郷**

〈古代〉平安期に見える郷名。「和名抄」三河国幡豆郡八郷の一つ。東急本は「磯伯」とする。高山寺本の訓は「之波止」。「地理志料」は「三河国内明神名帳」の磯伯天神を吉良町の津平柴戸大明神として，同地周辺に比定するが、「地名辞書」は「万葉集」巻三の高市黒人の歌「四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎかくる棚無し小舟」にみえる四極山の近辺と考え、海浜の地にあたる吉良町の南部の幡豆町に比定する。後者の地が当郷に比定できるかなお検討の余地を多く残すが、白鳳期の古瓦を出土する鳥羽神宮寺派廃寺があることが注目される。

三　和歌の解釈上

次に和歌の解釈上の見解をみてみよう。

（一）萬葉集（日本古典鑑賞講座　第三巻・高木市之助，田辺幸雄編、角川）Ｐ１１８

四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎかくる棚無小舟

〔巻三・２７２〕　高市黒人

四極山を越えて見渡すと、今笠縫の島にこぎ隠れようとする棚無小舟の小さな姿よ

（解釈・特異な空間把握。　はっきり場所のわからないことは遺憾だが、四極山はそれほどは高くない峠のような所と思われる。笠縫の島は、笠縫氏が笠を作り出す材料となる菅の多く生えた、これまた平らに近い島であろう。峠の上に顔を出してみると今ちょうど前方の島に、小さな舟が隠れようとする、という微妙な一瞬をとらえている。風景描寫ではあるが、その風景の中心は刻々にうごいてゆく小舟である。しはつ山の上に出る時間がもう少し早かったら、小舟は島とは離れすぎていたであろうし、遅かったらすでに隠れ去って見えなかったはずである。その微妙な一瞬にめぐり合うことによって、この風景は成立した。特異な空間把握というべきである。、、（後略）

（二）萬葉集・全訳注釈原文付（中西進著・講談社）Ｐ１８９

２７２　四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎかくる棚無し小舟

四極山　打越見者　笠縫之　嶋榜隠　棚無小舟

（解釈）四極山を越えて、見ると笠縫の島のあたりを漕いで姿を消していった棚なし小舟よ

９９９　血沼廻より雨そ降り来る四極の白水郎網手乾したり

濡れにあへむかも

右の一首は、住吉の浜に遊覧して、宮に還り給ひし時に、道の上にて、守部王の詔に応えて作れる歌なり。

従千沼廻　雨曾雫来　四八津之白水郎　網手乾有

沾将堪香聞

右一首、遊覧住吉濱、還宮之時、道上、守部王應詔作謌。

（解釈）血沼の浦のあたりから雨が降って来た。四極の漁師たちは網を乾しているのに、濡れないですむだろうかなあ。

右の一首は住吉の浜に遊んで離宮に還られた時、途上で守部王が詔に応じて作った歌である。

（三）**万葉秀歌**（斉藤茂吉著・上、岩波書店・Ｐ１３１）

「四極山うち越え見れば笠縫の島榜ぎかくる棚無し小舟」も佳作で、後年山部赤人に影響を与えたものである。四極山、笠縫島は参河という説と攝津という説とあるが、今は仮に契沖以来の、参河国幡豆郡磯泊（之波止）説に従って味うこととする。

（四）**万葉集入門**（久松潜一著・講談社、Ｐ１７１）

「四極山を越えてみると、笠縫の島にこぎかくれていく棚無

小舟がみえる。」（四極山や笠縫島は摂津の海辺であるとも三河の海辺であるともいう。）

（五）**和歌文学大系・萬葉集（一）**（稲岡耕二著）

「四極山を越えて海上を見渡すと、笠縫の島の陰に漕ぎ隠れようとしている、棚のない小舟が。」四極山は大阪市住吉区から東住吉区の東南部にかけての丘とも愛知県幡豆郡幡豆町・吉良町辺とも言う。後者か。笠縫の島は大阪市東成区深江とも、渥美湾中の島ともいう。四極山と合わせて後者か。

（六）**萬葉集釋注（二）**（伊藤博著）

「四極山を超えて海上を見わたすと、今しも笠縫の島陰に漕ぎ隠れようとする小舟が見える」

四極山〜　所在未詳。尾張の国の歌である前歌との関係で、それより東の〈和名抄〉（六）の参河国幡豆郡の条に「磯伯之波止」とある地と見る説〈代匠記・精〉に従う。この地は、今の幡豆町・吉良町付近。

笠縫〜所在未詳。上の「四極山」に続く地。

（七）**東海の万葉歌**

竹尾利夫氏が　四極山攝津説と三河説を対比させ要領よくまとめている。以下はその引用である。

『先ず摂津説は、四極山を大阪市住吉区から東住吉区にかけての丘を擬するのが一般である。これは巻六所載の天平六年（七三四）難波宮行幸の時の歌に「四極の海人」（6・999）と見え、その左注に、「住吉の浜に遊覧し、宮に還ります時に」とあることから、当地は住吉から難波宮との間に所在していたことを拠りどころとする。したがって笠縫の島は、宣長の「玉勝間」に「今東生郡の深江村といふところ、是なるべし」と推測しているごとく、大阪市東区深江から東大阪市足代にかけての往時の入海に浮かぶ島であったと考えてよい。

これに対して三河説は、「和名抄」に「幡豆郡磯泊、之波止（シハト）」とあり、愛知県幡豆郡吉良町の津平に志波止神社もあることから、幡豆町から吉良町付近の山が四極山に比定される。そして笠縫の島は三河湾に浮かぶ梶島を擬することが多い。「代匠記（精）」も三河説をとり、摂津説などに対して「東海道ノ内、三河尾張ヨリ此方ヲヨメル中ニ、此歌ノミ西街道ヲヨマムコト不審ナリ」と記す。確かに羇旅歌八首の配列からすると、やはり三河国に求むべきかと思われるが、配列の順序のみでは不安が残る。「全注」（西宮）は、270〜272歌は作者がある地名に立って景色を眺めたもの、273〜275歌は船を漕いで行く歌、276〜277は陸行の歌、という八首の分類意識を指摘する。今後に検討の余地を残していよう。なお、この歌は小異歌が「古今和歌集」巻二十、大御所御歌に「しはつ山ぶり」と題して、

しはつ山うちいでて見ればかさゆひの
　　嶋こきかくる棚無し小舟

という歌詞で収載されている。王朝和歌の世界で黒人歌が歌

い継がれていたことを示す興味深い例である。』

以上、万葉集の解釈上からは、摂津説と三河説が拮抗しており豊後説は少ない。

四　考古学・地理学からの視点

「古代景観の復原」（日下雅義著・平成三年刊）で日下氏は歴史地理学の上から「磯歯津路」を復原して、その途上に四極山があった可能性を示唆している。

磯歯津路についての日下氏の所説を少し長いが以下に引用する。

「大津道の北方にも、住吉大社の門前附近から東に向けて走る道がある。これは古くから「磯歯津路」と呼ばれていたらしい。この道は大津道や丹比道と違って、上町台地面をとおる西方の約三キロのほかは、大部分が不安定な氾濫平野にあたるため、道の痕跡は断片的にしか認められない。この道に関する史料としては

住吉津に泊る。是の月に、呉の客の道を為りて、磯歯津路に通す。呉坂と名く。　（日本書紀、雄略天皇十四年正月条）

四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎかくる棚無し小舟
（万葉集２７２）

血沼廻より雨そ降り来る四極の白水郎網手綱乾せり
濡れあへむかも　（万葉集９９９）

などがあげられる。ここに「四極山」および「呉坂」という表現がされているが、これらはどういう地形を指したのであろうか。このルートを少しくわしくたどってみよう。

磯歯津路は、ラグーンの港「住吉津」から細井川の岸（長峡）をとおって低位段丘にのぼり、そこからしばらく進んで中位段丘面に達する。この面の標高は十メートルあまりで、現在の長居公園の西南角付近がもっとも高くなっている。それからはゆるやかなくだりとなり、やがて旧天野川のつくった氾濫平野に出る。そこから低地をまっすぐ東に進み、喜連そして長原に至る。旧天野川の水量が少なかったためか、この間では古くからの景観をある程度とどめているが、長原以東ではそれを見出すことはほとんどできない。

「四極山」について、吉田東伍は「住吉より喜連へ行く間にひくき岡山の横たわりてあるぞ四極山にて」と、上町台地を漠然と指している（大日本地名辞書）。それにたいして、「日本古典文学大系」六七では、「シハツは、磯果つで、浜の端の河口、岬などか」と解説されている。さらに白水郎＝漁夫、海人と解するならば、四極山は上町台地の頂上付近から西斜面一帯を指したように思われる。当時の人々は、わずか十メートルあまりの比高であっても、近くにそびえ立つものであれば、それを「山」ということばで表現したのであろう」と述べている。さらに「山や坂について、現在の景や現在的感覚から安易に判断するのではなくて、当時の景や人びとの心にまで近づく努力をすべきであろう」と結んでいるがまさに傾聴に値する。日下氏

の作図による「六〜七世紀ころの摂津・河内・和泉の景観」をみれば上記の位置関係がよくわかる。四極山＝摂津説の補強材料である。

五　高市黒人について

次に作者、黒人のプロフィールをみてみよう。時代的には柿本人麻呂とほぼ同時代の人であるが、歴史書に登場することもなく下級の官吏であったと思われる。

平凡社刊「世界大百科事典」には

「生没年不詳。高市という氏は大和平野の南部の地名高市にもとづく。経歴は不明だが、文武天皇の大宝二年（七〇二）に先帝持統天皇の三河国行幸に加わり、また同天皇の吉野行幸のときに彼の作品があるから、持統・文武天皇のころ柿本人麻呂より少しおくれて歌壇に活躍した官吏だったと思われる。（中略）今日残る作品は、万葉集に見える短歌十五首（数え方によっては十六首）、すべて旅のあいだにうたわれた歌で、東は三河国、西は摂津国，北は越中国にわたる。」

の記述があるが、これは一般的な黒人像であろう。人麻呂の影に隠れて長らく埋没していたが、折口信夫の推賞によってその作品価値が見直された人である。近年「黒人論」が多数に発表されているが、中でも佐々木幸綱氏は黒人を「遅れて来る人」[4]と位置づけているのが注目される。また黒人の閲歴について、古くは高崎正秀[5]が宮廷伶人・采詩官説を展開している。

黒人の羇旅歌で「棚なし小舟」が出てくるものに

いずくにか舟泊すらむ安礼の崎
漕ぎたみ行きし棚なし小舟
（万葉集巻一・58）

がある。題詞に「二年壬寅、太上天皇幸干参河國時歌」とあり、持統上皇が三河国に行幸された折の歌であることがわかる。

「続日本紀」の大宝二年（七〇二）十月十日の条に

「〇甲辰．太上天皇幸参河國。令諸國無出今年田租。」とあり、翌十一月の二十五日条に、「〇戊子。車駕至自参河。免従駕騎士調。」と出ている。その間二十五日間にわたり尾張・美濃・伊勢・伊賀を行幸した記事が見える。この歌は持統上皇の行幸に従駕した黒人が、三河で詠んだとされていて製作年代のはっきりした歌である。なお持統上皇はこの行幸より帰京後一ヶ月弱の十二月二十二日、五十八歳で没している。黒人にとって印象深い従駕の旅であったと推量できる。「棚なし小舟」は左右の側板のない小さな舟の意で、現在北陸や山陰地方に残る刳り舟の類かとも言われている。万葉集中、「棚無し小舟」は三首ある。黒人の二首と笠金村の

「海乙女棚無し小舟漕ぎ出らし旅のやどりに梶の音聞ゆ」

（930）である。森斌[6]氏が言うように歌語として「棚無し小舟」を用いているのは黒人が嚆矢である。橋本達雄[7]氏は「棚無し小舟もやはり黒人の影響と思われる笠金村の歌に一例あるのみである」と書いて、笠金村を黒人に影響を受けた歌人であるとしている。

この「いずくにか」の歌趣が「四極山うち越え見れば、、、」に近く、おなじ「棚無し小舟」を詠み込んでいるために三河説の根拠としたい向きもあろう。

黒人が官人であり、宮廷歌人であったということは現在ではほゞ定説である。したがって彼の羇旅歌は、行幸従駕の折のものであるのか、官人としての地方赴任の際のものであるのかに絞られよう。万葉集の時代の旅は、従駕か官人赴任など、何らかの公的使命を帯びてのものであった。三重大学の広岡義隆[8]氏は、「〈観光〉の語は旧国鉄によって造語された新語であり、それ以前は〈物見遊山〉と言い、さらに遡っては〈歌枕を見に〉行く旅があったが、万葉時代にはこれらのいずれもが存在しなかった。万葉時代には天皇クラスにおいてこそ、個人の願望から発する旅はあり得たが、一般民衆においては一生海を見ることなしに生を終えた人が普通だったのである。これは官人においても同様であった。佐藤文義は黒人について〈北方志向の旅〉と言い、黒人自身の意思による〈能動的な旅〉を説くが、当時の社会情況では旅を目的化した私的旅行は考えられないと言ってよい」

と断じているが筆者も首肯したい。黒人が豊後や日向に赴任したという記録もないし、ましてや天皇行幸従駕で二豊路に足を伸ばした事実もない。黒人の行動範囲は大和を中心にして、おおむね三河・尾張・美濃・伊勢・伊賀・近江・摂津・越中とされており、都からはるかに遠い豊後を旅したということは当時の社会状況からして容認しがたい。

以上を総合した私見を以下に述べる。

(I) うち越え見れば、、、

「うち越え」の表現は万葉集に数首ある。それらの例から見て、奈良女子大の坂本信幸[9]氏は、「旅に特徴的な表現であり、旅路にある人の感慨が含まれている」と書いている。いうまでもなく「うち」は強めの意味の接頭語であるが、筆者は「うち越え」には完全に越えるという意味が言外にあると思う。したがって四極山は道路の途上にあり、そう高くはない丘陵であろう。この歌の解釈上は、前記　三の（一）日本古典講座第三巻が正鵠を得ている。万葉集巻三・３６５に笠金村の「塩津山うち越え行けば我が乗れる馬そ爪づく家恋ふらしも」がある。前川佐美雄[10]氏は「塩津山の峠を越えてゆくと、自分の乗っている馬がつまずいた。これは家人が自分のことを思っていてくれるからだろう」と解釈しているがここでの「うち越え」は越えていく→完全に越えるという意味に捉えている。岸哲男[11]氏によれば「塩津から国道八号線を北上して、沓掛から左へゴロゴロ石の露出した細い山道に入る。これが深坂越えで古代の北陸五カ国への官道であり、低い峠を越えるともう越前の国、敦賀市追分である。不破、鈴鹿と並んで三関の一つだった愛発の関が、この追分か次の疋田にあったらしいが、今その跡はわからない。（中略）こんなけわしい道を、公用を帯びた金村や越中へ赴任する家持も越えたのである」と書いている。

けわしい道ではあるが、標高六二八米の高崎山のようには高くないであろうし北陸道という官道が通っている。国境であるその頂を越えて詠んだのがこの歌であろう。豊後説では銭亀峠越えをもって高崎山を越えたこととしているが、地形上からみて無理があると思う。繰り返すが「うち越え」られた四極山は官道上にあり、したがってそう高くない山、丘状のものであったと思われる。

（Ⅱ）どこで見たのか

黒人の時代の豊後の官道網は、大宰府から豊後国府に通じる「豊後道」と、豊前国府～豊後国府間の「豊前道」であるが、「豊前道」は、同時にまた山陽道の到津駅（小倉）から分かれて豊前、豊後、日向、大隈の各国府を結ぶ西海道東路の一部分でもあった。豊後国府までの駅は下毛駅（中津）―宇佐駅―安覆駅（安心院）―長湯駅（別府）―高坂駅の順路となるが、長湯駅からの経路が問題である。奈良女子大の戸祭由美夫氏[12]は、長湯駅の所在地を「別府市の朝見川流域附近にあったと考えるべきであろう」とした上で、「高坂駅・豊後国府より別府市内の温泉地帯へ抜ける古代の西海道についてかんがえてみると、高崎山北麓の海岸沿いは江戸時代でさえ交通が困難であったから、銭亀峠を越えて高崎山の南西麓を朝見川河口付近に出るルートが使われていたと推定される。」と述べているが定説と認めていいのではないかと思われる。大分市史には「赤松越えというのは今の銭亀峠であり、峠を下って宮苑、賀来、荏隈をたどり府内に到るコースが古代から豊前との往還路であった」との記載があり、これに基づいて大分市歴史資料館の掲示地図は書かれている。[13]

私見では長湯駅→赤松→銭亀峠→七蔵司→三船→黒野の経路で、黒野で豊後道と合流したのであろうと推定しているが、いずれにしても銭亀峠を越えることは間違いない。銭亀峠越えをもって「高崎山をうち越えた」とするには無理があるが、百歩を譲ってみても銭亀峠からの視界には生石の笠結島は入らない。黒人はどこから小舟を見たのであろうか。地元大分で豊後説を強力に主張される元別府大学教授の佐々木均太郎氏[14]は「高崎山（六二八メートル）の銭瓶峠を越えて大分の国府に通う道は古くから昭和期まで続く。まさに、〈打ち越え見れば〉の趣そのものである。そして眼下には突然開けた明るい別府湾がひろがる。〈笠縫島〉（現在の大分市生石の小島）が横たわっている。海は静かである。漕ぎ進んできた〈棚無し小舟〉が今しも島影に隠れようとしている。黒人はしばし立ちどまって、旅愁をしみじみと感じている。高崎山こそその歌にふさわしい地形なのである。こうした地理的考究をしないで机上探査で済ませることは問題である。」と格調高く述べておられるが、銭亀峠から豊後国府に通ずる官道上には、残念ながら生石の小島を見通せる場所はどこにもないのである。地理的考究を主張される佐々木氏はどこからみたと指摘されるのであろうか。「眼下には突然開けた明るい別府湾がひろがる」と言われるが、銭亀峠から見える先は北浜・亀川・日出方向であって、生石や大分市域はまったく視界の外である。この地形は黒人の時

代も現在も同様であったと断言して間違いない。また、滝口弘氏[15]は佐々木氏同様、四極山＝高崎山説を主張されている。

「豊前の国到津から分岐した駅路が、豊前国府の仲津から、駅館、宇佐を経て長湯に入り、この峠を越して柞原から古国府の高坂駅を通って豊後国府に通じていたのである。」と述べ、「古代の速見郡長湯駅、今日の別府市から豊後国府に向かって四極山を越すと、そこからは大分郡笠和郷で、神崎、八幡の岡の向こうに生石地区が展開する。その大分港に臨む所に、今は陸地の小さい岡となってその一部を残す笠縫島がある。」として、どうも八幡、白木あたりで詠んだとされているらしい。氏の言われるように、古代の官道・豊前道が銭亀峠から柞原を通り大きく迂回していたのであろうか。仮にそうだとしても銭亀峠から、ダラダラと四キロ近くも下ってきた地点で「うち越え見れば」と詠むであろうか。この歌の真骨頂は、山の頂に顔を出した瞬間の風景描写にある。詠まれるべき場所として考えられるのは高崎山の頂上かもしくは銭亀峠の頂しかないのである。

さらに敷衍すれば、鴻巣盛廣は「万葉集全釈」（昭和五年刊）で「四極山は豊後・三河・摂津にある。豊後のは別府の東南海岸の聳える山で、之はこの歌の趣にあはないから問題にならないが、三河と摂津とはいずれとも決しかねる。」と書いている。佐々木・滝口両氏はこの説が豊後・高崎山説を少数派に貶めたとして猛反発しているが、峻険な高崎山を越えるというイメージは、鴻巣が説くようにこの「歌の趣にあわない」ことは素直に認めなければならないと筆者も思う。「歌の趣にあわない」というよりも、地形上から見て高崎山、銭亀峠周辺ではこの歌は成立しないと言ったほうが適切である。このことは銭亀峠に立てば一目瞭然である。

（Ⅲ）四極山ぶり

上代和歌の世界に「四極山ぶり」ということがあった。宮廷の大歌所（大内裏の内教坊）で舞妓の歌う風俗歌を大歌所御歌というがその歌曲の一つで、第一句が「四極山」をもって始まるくにぶり、所謂国見歌である。四極山と詠いあげるところに地霊讃歌（くにぼめうた）の本質があるとされている。国見歌の形式は「、、、、見れば、、、、見ゆ」と応じるとされているが、国讃め歌を源流として叙景歌が発し、羇旅・遊覧などの場を通して発達していったらしい。ここでは黒人の万葉集[16]巻三の小異歌を読み人知らずとして載せている。

読み人知らず（四極山振り）

四極山打ち出でて見れば笠縫の
島漕ぎ隠る棚無し小舟（古今・巻二十、大歌所）

藤原俊成

四極山檜の下葉を折り敷きて
今宵はさ寝ん都恋しみ（続後撰和歌集）

俊頼朝臣

四極山檜の若葉に漏る月の

影冴ゆるまで夜は更けにけり（新、続古今・巻三）

四極山風吹き荒ぶ檜の葉に
絶え絶え残る蜩の声（新、続古今・巻十七）

以上の四つの歌が「四極山振り」として歌われたのである。

古今集では、「うち越え」が「打ち出でて」となっているが、山部赤人の有名な「田児の浦ゆうち出でて見れば」に影響されてのことかと思われる。古今集の時代には、叙景に力点をおいて風景を浮かび上がらせる用語の使用例として、「うち出でて」が流行していたのであろうか。詞句が多少違ってこの歌が古今集に載り、大御所歌に挙げられたについて、「こういう形で大歌所御歌の中にこれが加えられているのは、平安朝人の間に、この歌の静寂な純粋な雰囲気がとくに喜ばれ、謡い物として広く行なわれたことを証するものであろう。」との見方がある。

赤人は黒人よりもすこし後の歌人で、斉藤茂吉[17]は黒人の影響を受けたと書いているが、この両者の関係は、黒人の「桜田へ鶴鳴き渡る年魚市潟潮干にけらし鶴鳴き渡る」（巻三・271）と、赤人の「和歌の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る」（巻六・919）を比較鑑賞すれば理解できよう。ところで中西進氏は「うち出でて」を広々としたところへ出る意味に解釈しているが、筆者はこの説にしたがって、四極山はそう高くない丘陵みたいな岡でそこを越えると広々とした風景が望める地形であると推量したいのである。

私見ではこの四首の四極山は同一の地名を指すものと思われるが、そうなると俊成も俊頼も豊後・高崎山を詠んだことになるが果たしてそうであろうか。四極山は都からそう遠くないところにあったとするのが妥当であろう。

(Ⅳ) 四極の白水郎

おなじ四極を読み込んだ歌に、万葉集巻六（999）の

血沼廻より雨そ降り来る四極の白水郎
網手乾したり濡れにあへむかも

があり、この歌の題詞に「春三月、幸于難波宮之時謌六首」とある。天平六年（七三四年）三月十日難波宮に行幸、十九日還御を指す。時の天皇は聖武天皇、知太政官事は舎人親王である。この歌は「右一首、遊覧住吉濱、還宮之時、道上、守部王応詔作歌。」とあるように、住吉濱から難波宮に帰る途中、随行していた守部王が天皇の詔に応じて詠んだものであり、地点は「しはつ」で四極・磯歯津・四八津とも書かれる場所である。題詞から「しはつ」は住吉濱と難波宮の間に位置していたことがわかる。守部王は舎人親王の子で、船王の弟であり、孝謙女帝のあとを継いだ淳仁天皇は弟である。父舎人親王は天武天皇の第五皇子、七二〇年総裁として〈日本書紀〉の編纂を完成させた人物として史上に名高い。この時詠まれた他の五首は

997　詠み人しらず
　住吉の粉浜のしじみ開けも見ず隠りてのみや恋ひ渡りなむ
998　船王の
　眉の如雲居に見ゆる阿波の山かけて漕ぐ舟泊知らずも
1000　守部王の
　子らがあらば二人聞かむを沖つ渚に鳴くなる鶴の暁の声
1001　山部赤人の
　大夫は御猟に立たし少女らは赤裳裾引く清き浜廻を
1002　安部朝臣豊継の
　馬の歩み抑へ駐めよ住吉の岸の黄土ににほひて行かむ

である。

守部王の歌（999）の解釈を中西進氏[18]によれば、「血沼の浦のあたりから雨が降って来た。四極の漁師たちは網を乾しているのに、濡れないですむだろうかなあ。」となる。

血沼廻は難波南西で住吉の対岸であるとされる。シハツは四極山の西方の地を云い、その海浜が住吉乃津の一画を占めていたのであろうと説く樋口和也氏[19]の説は説得性に富む。この歌にいう四極の白水郎の「四極」と「四極山うち越え、、」の四極山は一帯となった地域を指すと見ておそらく間違いないであろう。さらに加えて、往古菅を産し、皇室御料の蒲葵の笠を編む笠縫部の部曲民がいたので名付けられたと謂う「笠縫の島」が近くにあり、摂津笠縫邑跡のある深江神社（笠縫神社）が、現在の東成区深江にあることも四極山＝摂津説の有力な材料であると考えている。歴史地理学の上から、磯歯津路の途上に四極山があったと説く日下雅義氏の説も首肯できる。

以上のことから筆者は黒人歌の舞台・四極山は摂津にあったと結論したい。

おわりに

筆者は高崎山南麓の旧石城川村大字高崎（現挾間町）に生まれ社会人になるまでの二十二年間、朝夕この山を仰ぎつつ暮らしてきた。大字高崎は豊後国志に謂う「賀来郷高崎村」で、まさにわが愛すべき故郷の山である。その山が大分市教育委員会のいわれるように万葉名歌の舞台であればこんなに誇らしいことはない。できればそうあってほしいと思いたい。

しかし残念ながら筆者は以上の考察を通して、いまや豊後・高崎山説は殆んど成立の可能性に乏しいと結論せざるを得ない。学説上は未詳とされていて定説にいたっていないが、文献史学や考古学とくに近年著しい進歩を示している「環境考古学」・「考古地理学」によって、この歌の舞台がいずれ解明されることを期待して小稿を閉じる。

（注）

① 平成十六年三月十五日発行の「大分市文化財だより」

② 削除

③ 以下八首は下記の通り。（大分市史の原文による）

四極山打ち越え見れば笠縫の
　島漕ぎかくる棚無し小船（万葉集・高市連黒人）

四極山楢の下葉を折り敷きて
　今宵は寝なむ都恋しき（続後撰集・俊成）

四極山風吹きすさぶ楢の葉に
　たえだえ残るひぐらしの声（新古今集・二品親王）

四極山うのはなふきの仮庵や
　よひこもみえぬ雪のしたふし（夫木集・顕昭）

あらくまのなれて住むなる四極山
　やまもいかにかはけしかるらむ（夫木集・顕昭）

四極山楢の若葉にかさされて
　めらふさつおのたゆみなしよや（俊成）

四極山楢の若葉を漏る月の
　かがさゆるまによはふけにけり（続古今集・俊頼）

笠結の島たちかくす朝霧に
　いやとほやかる棚無し小船（新後撰集・土御門院）

④ 佐々木幸綱著・「遅れて来る人―高市黒人」

⑤ 高崎正秀著・「高市黒人、万葉集大成　九」

⑥ 森斌著・「万葉集作家の表現」

⑦ 橋本達雄著・「万葉集の時空」

⑧ 広岡義隆著・「黒人の羇旅歌八首（セミナー万葉の歌人と作品）」

⑨ 坂本信幸著・「高市黒人覚書」

⑩ 前川佐美雄著・「名歌鑑賞・教養文庫」

⑪ 岸哲男著・「近江の万葉散歩」

⑫ 戸祭由美夫著・「古代の交通路　Ⅳ」

⑬ 大分市歴史資料館・「おおいたの歴史と文化　P59」

⑭ 佐々木均太郎著・「万葉をたずねて　p29」

⑮ 滝口弘著・「九州の万葉　p230」

⑯ 万葉集（高木市之助、田邊幸雄編）

⑰ 斉藤茂吉著・「万葉秀歌　上」

⑱ 中西進著・「万葉の秀歌　上」

⑲ 樋口和也著・「萬葉集地名歌総覧」